

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	教育学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・教育学専攻・ 博士課程後期課程 2 年		山田 鋭生 印		
指導教員	所属・職名		氏 名		
	文学部・教授		北澤 毅 印		
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	<input type="checkbox"/> 社会
			個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題名	学校の授業場面における他者理解と教授実践の相互行為形式の研究				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
研究期間	2010	年度			
研究経費	200	千円			

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、学校の授業場面における他者理解に関して、教育社会学の立場からの分析を行ったものである。特に、エスノメソドロジー・会話分析の立場からのアプローチを試みるが、その際に前提となる社会学における他者理解についての理論的検討を行った。他者理解という問題は、古くから M. ウェーバーの理解社会学や A. シュッツの現象学的社会学などにおいて様々な形で議論されてきた。それらの先行研究に対し、本研究では H. ガーフィンケルが作り上げたエスノメソドロジーと、H. サックスが創始した会話分析の立場から批判的検討を行った。さらには、エスノメソドロジー・会話分析の立場から小学校の授業場面の分析を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[他者理解] [エスノメソドロジー] [会話分析]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 本研究における問題関心

小学校とは、一人一人異なった「学力」や「性格」を持った児童が集まってくる場所であるといえる。そのような場である小学校において授業を行ったり、児童と会話をしたりする教師の仕事には、常に児童を理解するという実践が伴っているといえる。例えば授業において児童とやりとりをする場合、教師は児童の言語や身体などの振る舞いを通して児童の考えなどを理解し、授業をうまく進行することが求められていると良いであろうし、気がかりな児童と面談する際のことを想定した場合、そこで求められるのはまさに児童をよりよく理解し、その面談のきっかけとなった問題などの把握・解消に努めることであろう。教師の日々の仕事の多くの部分は児童を理解する実践と切り離すことができない関係にあるといえるのではないだろうか。教師の仕事には児童を理解することが必須の要件として伴うのである。しかしそのような中であって、教師たちが児童をどのように「理解」しているかが問い直されたり、明らかになったりするのには、多くの場合授業の進行や児童との関わりにおいて何らかの齟齬が生じたときであるといえる。そのため、これまでの教師の児童理解を扱った研究において述べられたことの多くも、児童と日頃から深く関わることによって児童の心や感情を汲み取り、その心や感情を児童の立場に立って理解していき、それによって問題を防止することなどであると言えることができるように思われる。そのような際に問題とされている児童理解とは、共感的理解を基にした児童理解であり、現場の教師もまたそのような児童理解に努めることを求められていると言えるであろう。そして児童の心の変調や感情の変化にいち早く気づき、何か問題を抱えていると思われるときには、その問題への迅速な対応も求められているのである。このように、多くの場合において想定されている児童理解とは、児童の内面に<心>や<感情>といった言葉で言い換えられている、音声、言語、イメージなどの何か具体的に私的なものの存在を前提にしていることが分かる。<心>や<感情>のようなものは確かに、かけがえのない大切なもののように思われる。そうであるから、教師は児童の<心>や<感情>を理解することが要請されるのである。

しかし本当に<心>や<感情>が私的なもので、教師は児童の<心>や<感情>を覗き見るようなことによって、児童の立場に立ち、<心>の中を覗き込むことによって児童を理解しているのであろうか。もしそうであるならば、児童の<心>や<感情>を教師が自分の<心>や<感情>そのものとして受容するような「真の」理解には到底辿り着けるはずもないということになってしまうのではないだろうか。例えば<心>を個人に内在する言葉のようなものであるとする。そうした場合、その言葉としての<心>を理解するためにはその意味を「精確に」理解することが必要になるが、それを行うにもやはり言葉が必要になり、その作業は無限後退を招くことになる。これはガーフィンケル (Garfinkel 訳書 1995) が行った実験でも示されていることであるが、そのようなことが起きるのは児童の<心>や<感情>といったものが実際に具体的な指示対象として児童の内面に存在しているものではないからである。<心>や<感情>を児童の内面のどこかに存在するものとして捉え、「個人を単位とする存在論」(Coulter 訳書 1998) を前提として<心>や<感情>の理解という営みを考察しようとするのはこうした困難に辿り着くことになる。

そこで本研究においては、そのような児童理解に対して、「理解」とはそもそも上に挙げたような共感や心的な対象を前提とした営みではないこと、相互行為という側面からこそ児童「理解」が理解可能であることを示した。本研究においては、児童「理解」とは、教師と児童との相互行為の連鎖の中で「他者理解感」が与えられ続けることによって達成されるものであることを示したのである。

2. 本研究の具体的内容

上記のような問題関心に対し、本研究では以下のように研究を行った。

(1) 社会学における他者理解理論の検討

本研究においては、まず他者「理解」というものが教師と児童の相互行為の中に埋め込まれているものであるということを示すために、エスノメソドロジー・会話分析の視座を援用する。そのためにエスノメソドロジー・会話分析が批判的に乗り越え、その前史となった社会学理論を概観した。

まず、本研究は M. ヴェーバーの理解社会学についての検討を行った。特に、ヴェーバーの理解社会学における他者理解において重要であると思われる「直接的理解と動機的理解」「理念型」の概念について考察を行った。次に、A. シュッツが現象学的社会学という立場からヴェーバーの他者理解理論を批判したことについての検討を行った。特にシュッツは直接的理解・動機的理解と主観的意味・客観的意味に対しての批判を行っており、本研究においてはそれらの点をふまえた上で、シュッツが提起した人間行為の一次的・二次的構成概念、視界の相互性といった概念についての検討を行った。その結果、本研究ではシュッツの他者理解理論とは自己解釈作用による他者理解であると結論づけている。

以上のように、他者理解に関する社会学理論を検討した上で、小学校において収集されたビデオデータを分析するのに有効であると思われるエスノメソドロジー・会話分析の知見についての検討を行った。

研究成果の概要 つづき

まず、H. ガーフィンケルが指摘した他者「理解」の方法として、解釈のドキュメンタリー・メソッドについての検討を行い、さらにH. サックスが指摘した他者「理解」の方法として、「第二のストーリー」というアイデアを検討した。その際、本研究においては、この二者のうちの後者に特に着目した。サックスによれば、ある人物が他者によって語られたストーリーの「理解」を達成するためには、単に「私はそれを理解できた」と述べたり相手の言ったことをそのまま繰り返すようなことは理解の表示の方法としては<弱い>ものである。そのような方法でなされた第一のストーリーと第二のストーリーを結びつき(『理解』の手段)をサックスは「claimed relationships」と呼び、第一のストーリーが語られた後で、それと類似した第二のストーリーを語るという方法によって「理解」を達成する「proved relationships」と区別する。第一のストーリーと第二のストーリーの間の「claimed relationships」のように、単に相手の言ったことを繰り返したり、「なるほど」などと言って「理解」を「claim(主張)」することは、「理解」の達成の方法としては弱い物であるといえる。相手の言ったことが理解できていなくても、言ったことを繰り返したり「なるほど」などということは可能だからである。一方で、第一のストーリーと第二のストーリーの間に「proved relationships」を作りだし、「理解」を「prove(立証)」する方法は強力な「理解」の達成方法であるといえるのである。小学校の授業場面でいえば、教師は第一のストーリー(児童の発話)と第二のストーリー(教師の発話)の間に「proved relationships」を作り出すことによって、児童の発話の「理解」を達成しているといえるのではないだろうか。

本研究においては、このようなサックスのアイデアを基にして、「自らの発話が教師に理解されている」という社会的構造的感(Cicourel, 1973)を児童がいかにして持つことが可能になるのかということを探究するという方向性を見出した。この「理解されている」という社会的構造的感、すなわち「他者理解感」の探究の方向性こそ、学校における他者「理解」研究に寄与するのではないかと考えている。

(2) ビデオデータの分析

以上のような理論的背景のもとに、小学校において収集したビデオデータの分析を行った。分析したデータは、小学校における算数の授業場面を録画したビデオデータである。

その授業場面では、「4分の3d1のペンキで板を5分の2m²塗れました。このペンキ1d1では板は何m²塗れますか」という文章問題について、なぜ「5分の2÷4分の3」という式によって答えを導き出すことができるのかということが主な課題となっていた。教師は班に分かれてその理由を話し合うように児童に指示を出し、「どうして5分の2÷4分の3という式になるのか」を与えられたホワイトボードに書き、班ごとに発表させるという手順で授業を進行していた。その発表の際に、ある児童は「簡単な数字に置き換えて数式の仕組みを考える」といった主旨の発表を行うのであるが、その発表に対して、教師は類似した自信の体験(すなわち、第二のストーリー)を語るのである。教師はその第二のストーリーによって児童の発表(第一のストーリー)の理解を達成するのであるが、この場面こそ「他者理解感」が産出される相互行為場面であるといえるのではないだろうか。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (山田鋭生、他者理解の社会学的分析に関する試論—他者理解感の探究という方向性— [仮題]、立教大学大学院教育学研究集録、8号、2011年 [近刊予定])